九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

森山隆著『上代国語音韻の研究』

原口，裕
静岡女子大学助教授

https://doi.org/10.15017/12176

出版情報：語文研究. 33, pp.47-50, 1972-05-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

紹介

森山　隆著『上代国語音韻の研究』

原口　裕

上代語の母音体系の通時的な処遇をテーマに、森山隆氏の多年の研究がまとめられた。史前日本語より上代へ至る史的変遷をあつかった専著としては他に例を見ないものである。

上代語の母音組織やいわゆる音節結合の法則などが、通時的にどのような性格のものであるかは、周知のとおり、十分明らかになってはいない。上代語の遡及に関して容易に見解の一致が得られないのは、むしろ当然のことで、馬渕和夫氏の本書の書評（「国語と国文学」四六年九月）にも見られるごとくである。ただ、語源的な詮索に傾きがちであったり、演繹的な方法を取らざるを得ないこの分野で、微視的な方法をもあえて辞せず、事実の入念な分析から母音体系の変遷を再構しようとする本書は、その提出する独自の仮説と、犀利な方法とによって、基礎的事実の記述をすすめ、新たな発展的視点を示すものと言えよう。

本書の目次を示すと

序

序章　上代国語音韻の研究方法とその意義

第一章　上代日本語の周辺

第一節　魏志倭人伝の倭語表記について

第二節　隋書倭国伝における国語表記について

——利・尼・堆などの用法——

第二章　上代オ列乙類の諸問題

第一節　上代に残存するö～ü対応について

第二節　上代オホヲ音節の結合的性格

第三章　上代エ列乙類の形成

第一節　エ列乙類遡源——ë～ö交替現象の意義——

第二節　上代エ列乙類の性格

第四章　ア列およびイ列乙類の変遷

第一節　上代ア列の後母音性について

第二節　イ列乙類の変遷——音価推定の方法論的考察——

第五章　オ列甲類およびウ列に関する二・三の問題

第一節　七・八世紀におけるオ列甲類の変容

第二節　上代ウ列の音価推定

第六章　母音音節の脱落・縮約現象

第一節　母音音節の脱落現象とその意義
第二節　母音音節の縮約現象について
第七章　連濁現象の意味論的性格
第一節　上代における連濁現象の実態
第二節　不連濁語の存在とその意義
第八章　音韻対応による意味分化の一形態
第一節　上代語「むた」「うらうら」の背景
第二節　万葉語「ををり」の表記とその語義
あとがき
索引

右のとおりで、整然とした構成になっているが、その内容は、母音組織の変遷過程の記述と、脱落・縮約や連濁現象についての形態音韻論的な分析とに二大別される。

前者では、まず、各音節の具体的な音変の状況を明らかにし、その歪みを体系として捕捉する（序章）ために、可能な限りの仮名用字と漢字音との精密な対比が試みられる。

①ア列について。魏志倭人伝では（一章一節）、ア列表記に主流の魚部麻韻所属字から非後舌的な広めのaを推定する。上代語では（四章一節）、歌韻系字母多用からするア列の後母音的性格の指摘（有坂説）は、舌音系麻韻字の頭子音の制約、唇牙喉音系で、上古魚部出自麻韻字のe（甲）化による制約などによる結果的多用であって、その特殊な条件からは主張できないとする批判に加え、上古歌部出自麻韻字の常用字母化などから、上代ア列は推古朝以降後舌母音性を失いつつあり、その非後舌化が音韻体系全体の変容に影響して、音節結合の法則の形骸化をもたらしたと推定する。有坂説の批判は甚だ綿密である。結合的性格からaの中性化を認める泉井説にも関連し、ア列の変容を上代母音問題の核心的主題とする（一八六頁）提言の意味は極めて大きい。

②ウ列について。魏志倭人伝では、中舌的合口ə音による特徴などから開き加減の〔U〕を推定し、上代語で（五章二節）、大野晋氏の舌音系模韻字代用説を実例をあげて批判し、常用字母定着の経過が緻密に追求されている。しかして、尤韻・上古魚部出自虞韻・侯韻の先後関係から、/ウ/の口の開きがゆるやかであったことの推定と、魂文韻字の使用・ウ列オ列の二重形の存在から、新しい時代における中舌寄りの変容を述べて、ア列と同種の傾向を明らかにしている。ただ、有↓（汗）↓宇の交替や君字の使用には文字の視覚的特徴も考慮されるべきで、漢字音との対比の象徴的事例にあげられるのはいかがであろうか。また、訳経で多用される具（群母）が本邦でも常用化されるといった文化史的背景も一方にはあろう。

③オ列甲について。魏志倭人伝では、魚部模韻所属字が中心で、開いた〔ɔ〕であった可能性が強く、推古朝以降の状態については（五章一節）、模韻のɔ↓o化の過程に対応する中で、六〇〇年代にɔ系豪侯韻所属字の使用が見られること・高の遺存的用法・古事記における刀↓斗の仮名用字の交替などから、ɔ↓o化の完了を七〇〇年代に入ってのものとする。このオ甲のu寄りにオ列ウ列の二重形も生起したもので、ウ列の前より化の因にもなったと解釈される。伊都国の都は義字的用法であるとの指摘もあり（頼惟勤氏説）、刀↓斗の交替は、ガ表記に我

を用いない用字上の配慮と同種のものとも考えられ、問題は残るであろう。ウ列にも関連して、模韻の合口性についての氏の御意見も更にうかがいたい気がする（合口的要素を認める考えも示されている。一二八頁）。

④オ列乙について。魏志倭人伝では、之部蒸部所属韻が主流で（但し、臺は義字的使用か）、〔ö〕よりいくぶん開いた中舌性をもち、隋書倭国伝では（一章二節）、灰韻歌韻所属字の用例から、/ア/に対するɐとオ甲に対するəの二系列の可能性の推測もある。結合様式からö$_1$ö$_2$の均斉のとれた女性母音を想定される著者の、字音からのアプローチの一つである。

⑤イ列乙について。微韻から之韻への変移を中心に考える亀井説の検討で（四章二節）、微韻が選択的に使用できる状況にない事実を明らかにしてこれを批判し、微韻の音価推定にかかわる諸家の学説の検討から、せまい形のəiを抽出される。支之韻字の独占を許さない微韻開口字の使用などより、ïとəの中間的なものからïへの変移を推定し、男性母音変容の歪みの影響を考えられる。通説の長音的性格を否定する立場である。用字の分析と字音の推定は、細微にわたって余すところがない。また、隋書倭国伝における利尼（ラナ）の使用に関する上古脂部開口韻の検討（一章二節）と比較して、氏の研究の進展が知られる。ただ、結合的性格への言及はないが、泉井氏のイ列乙男性母音説や、服部氏の首里方言よりする甲〔ji〕乙〔i〕説などとはどのようにかかわるであろうか（オ列甲では服部説への参照がなされている。二三二頁）。今後の展開はまことに興味深いものがある。

以上、すぐれて男性的であった基幹母音の非後母音化による男女母韻の対立的特徴の減少が、音節結合の法則を形骸化し、ひいては上代特殊仮名遣崩壊の因ともなった史的経過を、用字の字音の上で丹念に跡づける著者は、一方で、その変容に見合う、結合様式の機能を、意味論的な肉づけを加えて（序章）遡及し、上代語に現出している「跛行的」な対応関係の復元を試みられる。即ち、ö～uの対応で異義的関係をもつ豊富な事例をあげ、ö—ö・u—aの二音節語に一般称対特殊称の意義対立の結合様式を見出しておられる（二章一節）。挙列（限られた資料において、その数は決して少くない）の実証は、「むた」「うらうら」の語義の検討（八章一節）に見られるごとくあざやかである。同義・類義の関係にあるö～aの対応（八章二節「ををり」の考証はその一例）に対して、ö～uの異なった積極的な対応の結合機能を認めることから、更にa・uにそれぞれに対応する別種の二系列の女性母音が予想され、均斉のとれた母音体系の想定がなされることになる。母音交替による形状言の実現に意義関係を関与させない川端善明氏の説もあるから、この問題は今後の上代語研究の焦点の一つと言えよう。また、aiよりの転成のみで形成されたのではない（三章一節）、安定した存在であったエ列乙（三章二節）や、〔ï〕より位置の低いイ列乙（四章二節）は、この均斉のとれた基幹母音の対応にどのように位置するのであろうか。氏の研究の展開が待たれてならない。

要領を得ない紹介で限られた紙幅を費やし、六・七章の形態音韻論的な分析に全くふれることが出来ないのは遺憾であるが、事例の周到な実証から、「みせかけの法則」を厳しく拒否する

記述的方法が一貫していることを述べて稿を終えたい。

本書における仮名用字と漢字音の対比の方法は、巨視的に共通項を求めるのでなく、選択の可能性を海彼の史的実情に緻密に照らして明らかにした上、所属韻字のかたよりに蓋然性を見出そうとするものである。それだけに、改めて仮名用字の音写の精度が問題にされてよく、視覚的な記号としての性格も論じられる必要があろう。ことに中国文献における古代知識人の用韻の背景や、外国語表記の一般的な傾向についての調査も欠かせないと思われる。問題は中国音韻史の機微にもふれるもので、中国音韻史家による本書の評価が別になされねばならない。その意味では、この文章は、一知半解の徒の紹介にすぎないものであることをおわびする次第である。

（昭和四十六年一月十五日　桜楓社刊　四八〇〇円）

受贈図書　46年10月～47年3月

今泉蟹守歌文集　中原　勇夫
国語音韻論の構想　前田　正人
国立国語研究所資料集8（現代新聞の漢字調査〈中間報告〉）　国立国語研究所
中世歌書翻刻第2冊　蒲生知和歌集　稲田　浩子
王朝　第四冊　王朝文学協会
万葉と九州　中村　行利
善本写真集35　古活字本　天理図書館
善本写真集36　泰西名著古版集第一　天理図書館
大津絵ぶし（長唄稽古本）　今井　源衛
狂歌江戸の花　今井　源衛
藤原実国集・源師光集（修復本文）　森本　元子
私の今治市へ寄附したる文化財総覧（上・中・下）　河野　信一